

## 論議の積み重ねが、社会的責任に関する将来の ISO 26000 についてのコンセンサスを向上させる

---

将来の ISO 26000 発行へ向けて作業をしている社会的責任に関する ISO 作業グループ (ISO/WG SR) の先日開催された総会において、参加したマルチステークホルダー間でのコンセンサスが形成された。

2009 年 5 月 18 日～22 日にカナダ国、ケベック州ケベック市で開かれた第 7 回総会では、総会前に行われ投票の結果承認された CD (委員会原案) に対して提出された 3,000 以上のコメントから抽出した課題を検討した。ISO 26000 は、2009 年 10 月までに国際規格原案 (DIS) の段階へ移行することとなった。

60 カ国から 300 人以上の専門家と約 20 のリエゾン組織が一同に会したケベック総会の主な成果は、投票時に提出されたコメントから重要問題を抽出し、さらにそれへの対処方法について、進展が見られたことである。WG における発展途上国の数は増え続けており、現在、63 の発展途上国から 221 人の専門家が、先進国からは 136 人の専門家が参加している。

ケベック総会におけるステークホルダーの意見交換は、貿易障壁、人権及び使いやすさなどの多岐にわたる問題に関して、ISO 26000 の完成度をより高める結果となった。

WG SR の議長である Jorge E.R. Cajazeira はこう述べている。「今回の総会はいくつかの「白熱した」討論を含むすばらしいものでした。それにもかかわらず、正義感と公正さがかつてないほど細部にまで行き渡り、その発行までの道のりにおいて新たに重要な一歩へと ISO 26000 原案を進展させることができました。」

WG SR 副議長の Staffan Söderberg はこう語っている。「我々はその週に合計で約 7000 時間働きました。305 名の SR 専門家が複雑な問題に対して合意に達したことは小さな奇跡です。実際に我々は、社会的責任に関する手引の原案について更なるコンセンサスを得ることができ、トンネルの出口に光を見出すことができました。」

総会には ISO 副事務総長の Kevin McKinley 氏が出席し、次のような意見を述べた。「包括的で透明な討論の場を準備するために、前もって 1 週間にわたってあらゆる努力が行われました。

WG はコメントを検討し、文書に関するコンセンサスを高めることに注力することができました。」

第7回総会は *Bureau de normalisation du Québec* (BNQ-ケベック州標準局)主催、カナダ規格協会及び *Ministère des Relations Internationales du Québec* (ケベック国際関係省)の後援により開催された。ケベック州知事 Jean Charest、国際関係大臣 Pierre Arcand が参加者に歓迎の挨拶を行った。

社会的責任の精神のもと、本総会は「ゼロ排出-ゼロ炭素」の総会を目指して組織された。このWG では初めての試みである。次回 ISO/WG SR 総会は 2010 年前半にデンマークのコペンハーゲンで開催する予定である。ISO 26000 の発行は 2010 年 9 月を目標にしている。



ケベック総会で撮影された ISO WG SR リーダーシップチーム・メンバー(左から右へ): Jorge E.R. Cajazeira 議長、Kristina Sandberg 事務局、Eduardo Campos de São Thiago 副事務局、Staffan Söderberg 副議長、Sophie Clivio ISO 中央事務局、技術プログラム・マネージャー (撮影: Jorge E.R. Cajazeira)

### ISO 26000 の次のステップ

国際規格 ISO 26000 社会的責任に関する手引は、国際規格原案(DIS)が公表され、開発の重要な段階に到達した。

ISO の各国メンバー機関が投票することができ、また規格案に対してコメントを提出することができる 5 カ月の投票期間 (2009 年 9 月 14 日から 2010 年 2 月 14 日まで) が始まった。参加しているリエゾン組織もコメントを提出することができる。提出されたコメントは、ISO 26000 を開発している社会的責任に関する ISO 作業部会 (ISO/WG SR) の次回会合 (2010 年 5 月開催予定) で検討される。DIS 投票で可決されると、最終的な修正を加えた文書が、最終国際規格原案 (FDIS) として ISO メンバーに回付される。投票が可決されれば、ISO 26000 は、2010 年末に国際規格として発行される予定である。

投票の可決には、P メンバーによる投票の 2 / 3 の賛成と全ての ISO メンバーの投票総数の 1 / 4 以下の反対であることが必要とされる。D リエゾンのコメントは、WG リーダーシップがコンセンサスがあるかの判断を行う際に考慮される。

ISO 26000 は、主要なステークホルダーグループを代表する専門家の中で得られた国際的なコンセンサスを基礎とする調和のとれた手引をグローバルに提供し、社会的責任におけるベストプラクティスの実現を世界中に促進する。

この規格原案の序文は、ISO 26000 について次のような主要メッセージを含んでいる。

- ISO26000 は、社会的責任の基本となる原則、社会的責任に関係する中核主題及び課題及び既存の組織の戦略、システム、慣行、プロセスに、社会的に責任ある行動を取り入れる方法に関する手引を提供する。
- ISO26000 は、組織の大小を問わず、先進国及び途上国のどちらで活動するかを問わず、民間、公的及び非営利のあらゆる種類の組織にとって有用であることを意図している。
- ISO26000 は、マネジメントシステム規格ではない。この国際規格は、認証目的、又は規制若しくは契約のために使用することを意図したものではなく、それらに適切なものでもない。
- ISO26000 は、各組織の社会的責任の理解及び導入の程度はさまざまであることを認識して、社会的責任の課題に取り組み始めた組織、また、より責任を持って実行している組織にも活用できるように意図されている。

ISO/WG SR は、ブラジル(ABNT)及びスウェーデン(SIS)の ISO メンバーが共同でリーダーシップをとり、92 カ国と 42 のリエゾン組織から 436 人のエキスパート及び 195 人のオブザーバが参加している。6 つの主要ステークホルダーグループ（産業界、政府、労働者、消費者、NGO、及びサービス、サポート、研究などの部門）が地理的及び性別のバランスを考慮しつつ代表者を派遣して参加している。

ISO 26000 の手引は、公的機関及び民間企業の既存の SR イニシアティブによって開発されたベストプラクティスを利用している。これは、国連及びその専門機関（特に国際労働機関(ILO)）による関連の宣言並びに協定と一致し、これらを補完する。ISO は、ILO の国際労働基準との一貫性を確保するために、ILO との間で覚書(MoU)を締結した。ISO はさらに、ISO 26000 の開発協力を強化するために、国連グローバルコンパクト事務局(UNGCO)及び経済協力開発機構(OECD)とも MoU を締結した。

ISO 26000 及び社会的責任に関する ISO 作業部会の詳細については、専用の Web サイト [www.iso.org/sr](http://www.iso.org/sr) を参照のこと。この Web サイトには、ISO の SR イニシアティブの背景について説明した文書、作業の進捗状況及び実施方法に関する文書及びプレスリリース、WG SR のメンバーシップ及び構成、ISO 26000 の開発に参加する方法、ニュースレター、開発スケジュール、FAQ、問い合わせ先などの情報が掲載されている。これらの情報の多くは、複数の言語で入手することができる。DIS を含む作業文書は、[www.iso.org/wgsr](http://www.iso.org/wgsr) で入手することができる。

## 世界における ISO 26000 : IRAM は ISO 26000 に関するコミュニケーションをどのように行っているか

IRAM（アルゼンチンの国家標準機関）は、WG SR の活動について、当初から、幅広くコミュニケーションを行っている。当初、IRAM のこの活動は、意識を向上させ、国内委員会における効果的な活動を促進させることに焦点を当てていた。今日でも、意識向上に焦点を当てているが、主には ISO 26000 の将来的なユーザーを育てること、及び政策立案者とのコミュニケーションに焦点を当てている。

2005 年以来、新聞並びに専門誌や一般誌に 50 以上の記事が掲載され、常に特定の対象に向けた基本的な記事が用いられてきた。2006 年から 2008 年の間には、プレスコンファレンスが 1 回、テレビ及びラジオでの報道が 10 回あった。

十分に焦点を絞ったメッセージを選択することの重要性を認識しつつ、ISO 26000 に関する一貫した正確な情報を多様な聴衆に効果的に広めるため、ベーシックプレゼンテーションが 60 の異なるイベント（3,500 人の参加者）において用いられてきた。

教育においては、が 10 の異なる公立及び私立の大学における修士課程及び博士課程で（ISO26000 に関するコミュニケーションを）実施した。教育研修においては、IRAM が ISO 260000 に関する特定のコースを提供し、また、品質及び環境マネジメントに関するコースの中で SR や ISO 26000 について紹介した。

SR 一般及び特に ISO 26000 に対する関心を高めること、並びに ISO 26000 の利用及び SR の需要の増進を狙ったコミュニケーションは、正式にスペイン語に翻訳された全ての WG SR の文書を IRAM のウェブサイトに掲載したことによって達成されている。

## ISO 26000 に関するコミュニケーション

**FAQ：私の組織は、IS 26000 の使用についてどのように言及することができますか？**

ISO 26000 は、社会的責任に関する手引を提供する自主的な国際規格です。すべての種類の組織は、次のように、ISO 260000 を支持し、その使用を認めることが奨励されます。

「組織」が、社会的責任に関する手引を提供する参照文書として、ISO 26000 を認識している。

及び／又は

「組織」が、その価値及び慣行の中に社会的責任を統合するためのガイドとして ISO 26000 を使用している。